9．建築物

9－1．家の建て方

笹村さんの父親（笹村二郎さんのまごじいさん）だけが立派な柾屋根の家に住んでいたが、それ以外の人は草小屋だった。14～5歳までヨシの草屋根があった。屋根は本葺きだったが、よそから来た人はエンバクで屋根を葺いている人もいた。だいたいの家の壁は土壁だった。床は、板だった。笹村さんが柾屋根の家を新しく建てる前は土間でヨシで編んだキナ　kina を敷いていた。笹村さんは畑を持っていた。11歳頃で建て直す前はどこの家も炉だったが、その後ストーブになった。

十勝川の下が東側で、入口が東に向いていた。他の家の戸口は東向きだが、私の家の戸口は南向きだった。

［上野サダ氏］

9－2．家の内部構造

私たちの代では、アパオロプペ　apa oroppe（戸のスダレ）を掛けたことはない。東にも大きな板窓があって紐であげおろしして使った。年寄りの家の窓にはスダレ(アパロプペ　aparoppe)が掛けてあった。ヌサ　nusa　は、昭和46年に母親が亡くなるまであった。ヌサは、西向きで十勝川の上流方に向いていた。母親が病院に入っているときに、亡くなったらヌサを始末してくれるように山川のおじに頼んでおいた。ヌサの方向にヌサにイナウを出したりする窓があって、ロルンプヤル　rorunpuyar　という。東側に押入が一畳分くらいの幅で家の長さ分だけ長くあった。ヌサの窓に近い所(上座)は、ロッタ　rotta　という。炉縁木は、イヌンペ　inunpe　という。炉は、アペソコッ　ape sokot　という。ヌサに向かって右側の上手にじいさんが座り、下手にばあさんが座る。

火の神は、アペウチ　カムィ　ape uci kamuy　とかアペウチ　フチ　ape uci huci　という。毎年、イナゥこしらえてお祈りしている。

大きなつのの生えた毛虫を家の中で見ると不幸になると母親に言われた。アラタのばあちゃんも経験があるという。一昨年、玄関でつののある毛虫を見たのでびっくりしてイナゥこしらえてもらってカムィノミしてもらいその虫を投げて（捨てて）もらった。家の四方に酒をあげてお払いして、塩でお払いしてもらったけど次の日の朝もまたいた。3日も現れた。化物扱いして悪かったなと思い、虫に謝ると、それ以来現れてこない。

［上野サダ氏］